

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：33919

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K01972

研究課題名(和文) 観光の持続可能性と日本型指標システムの確立を目指して

研究課題名(英文) Sustainability of Tourism and Establishment of Japanese Tourism Indicators System

研究代表者

二神 真美 (Futagami, Mami)

名城大学・外国語学部・教授

研究者番号：70209138

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、持続可能な観光指標(STI)を用いた観光地マネジメント手法の確立を目指し、STI研究に関する国際的な査読論文のレビュー、世界基準となっている世界観光機関(UNWTO)の指標モデルや国際認証機関(GSTC)の評価基準等の比較分析を行った。さらに欧州型STIシステムの開発・導入に携わった専門家に対する聞き取り調査やアジアでの現地調査等の結果を踏まえ、日本型の持続可能な観光指標システム(JTIS)として、世界基準に準拠しつつも国内の実態に対応できるJTIS原型モデルを提示した。

研究成果の概要(英文)：This research aims to investigate how tourist destinations can be best managed in sustainable ways by applying a set of sustainable tourism indicators (STI), which are designed to measure the impact of tourism on certain destinations. It first reviews studies of STI in peer-reviewed journals. The results reveal that most studies frame sustainable tourism indicators thematically in terms of environmental, social or economic impact. Interview surveys are further conducted with the experts who have designed and implemented the European Tourism Indicators System (ETIS) and the Global Sustainable Tourism Criteria (GSTC) for tourist destinations. The results of the survey and field investigation reveal that an increasing number of tourism industries and destinations have adopted a set of indicators based on globally standardized criteria. The results of the study contribute to creating a preliminary model of Japanese Tourism Indicators System (JTIS) for sustainable development.

研究分野：地域研究 観光学

キーワード：持続可能な観光指標(STI) 観光地マネジメント 日本型持続可能な観光指標システム(JTIS)

## 1. 研究開始当初の背景

持続可能な開発を実現する経済の推進が提唱される中、2015年に国連は2030年に向けた新たな持続可能な開発目標（SDGs）として17の目標と169のターゲットを策定した。その中の12番目の目標として、「持続可能な生産消費形態の確保」が掲げられ、持続可能な開発が観光業や観光地にもたらす影響を測定する手法の開発・導入が求められている。こうした観光の持続可能性を可視化するための有効な方法として、一つには持続可能性を包括的に捉える指標群を体系的に構築する方法が挙げられる。

こうしたデータに基づく観光地マネジメントの動きは、観光の分野では国連世界観光機関（UNWTO）による観光地向けの持続性指標の開発と地域適用の動きとして現れてきた。2004年にはUNWTOによって『観光地向け持続可能な開発指標：ガイドブック』が纏められ、観光に係る全ての指標群（700+）が基本的な観光上の課題（13項目）の枠組みに沿って整理されている（二神 2008）。

世界の諸地域では国が主導し、持続可能な開発のための将来ビジョンに基づく観光政策の立案がなされてきた。さらに観光地の計画段階から具体的な指標を用いた手法が導入され、地域へ実際に適用された結果から学び、必要に応じて適切な対応を行うといったPDSAサイクルも確立されてきた。しかしながら、日本では観光政策は成長モデルに基づいて一律的に立案されるのが一般的で、持続可能な観光政策が実務レベルで十分に活かされた事例は未だ見られない。国を挙げてインバウンド政策が急速に進められる中、地域の豊かな資源を賢明かつ持続的に活用していくためには、持続可能な開発目標に合致した観光のあり方を学究的に理論構築することがこれまで以上に求められている。

## 2. 研究の目的

日本において持続可能な観光政策及び戦略が確立されていない背景には、1)持続可能な観光といった包摂的なビジョンを達成するための組織（持続型観光 DMO）を形成することが難しいこと（組織上の課題）と、2)観光の持続可能性を定性的及び定量的に測る手法が十分に確立されていないこと（方法論上の課題）、そして 3)持続可能な観光に対する需要が十分に喚起されていないこと（マーケティング及びコミュニケーション上の課題）といった要因が挙げられる。本研究は、その中の方法論上の課題に取り組むもので、特に持続可能な観光指標（STI）を用いた観光地マネジメント手法に焦点をあてる。海外の先行事例を体系的に分析した上で、日本に適した観光の持続可能性指標システムを構築し、地域適用することを目的としている。したがって、同システムを実務レベルで活用できるツールの開発も併せて目指すものである。

## 3. 研究の方法

本研究では、平成27年度から3年間、海外の先行研究・事例の体系的分析、持続可能な観光指標（STI）システムの類型化と最適モデルの抽出、そして国内地域の持続型観光の実態調査、日本型STIシステム構築に向けた地域適用の実証研究といった一連の研究を段階的に遂行していった。研究方法としては、大きく以下の4つの定性的及び定量的な分析手法を用いて行った。

### (1) 持続型観光指標研究のデータベース分析

第一の研究方法として、海外の持続型観光指標に関する学術的動向を把握するため、既存のレビュー論文（Zeppel 2015）の結果を踏まえた上で、査読のある英語圏の学術誌に掲載された関連論文について、データベースからキーワード（持続可能な観光+指標）検索により入手した論文を分析した。分析にあたって、論文を1)主たる研究分野、2)研究目的、3)研究方法、並びに4)指標の構成方法に着目して類型分析を行った。

### (2) 指標を用いた観光地管理に関する分析

先行事例に関する第二の分析方法は、上記のデータベース分析の対象から外れてしまうが、本研究の目的にとっては関連性が高く重要な情報源として、国連機関等が発行する政策文書や統計データ、及び海外の政府機関や非営利組織のSTI関連資料・データを用いた持続型観光指標の比較分析を行った。

### (3) STI指標の開発・適用に関するヒアリング

さらに本研究では、観光の持続性指標の開発及びその地域適用に関してより深い理解を得るため、その作業に直接かかわってきた海外の研究者や実務家に対して聴き取り調査を実施した。国内においては、日本で唯一GSTC認定の持続型観光基準を保有する日本エコロジ協会代表（高山傑氏）に対するヒアリング、GSTC国際認証の日本導入・普及に取り組む日本エコツーリズムセンターでの参与観察、さらに世界遺産登録地域（岩手県平泉、福岡県宗像等）や中部圏の持続型アグリツーリズムの農家や関係機関に対する現地視察及びヒアリングを継続的に実施した。

### (4) 日本型STIシステムの地域適用性の検証

海外での調査結果を踏まえ、日本型STIシステム（JTIS）の確立に向けて、実証的な予備調査を2つの自治体を対象に実施した。その中で、自治体を中心とした地域レベルでの活用を目標に持続可能性評価シートとしてJTISスコアカードの開発に着手し、実用化に向けた試行調査を実施した。

## 4. 研究成果

### (1) 持続可能な観光指標（STI）の学術研究

学術誌のデータベース分析の結果、STI研究に関する査読付き論文（初出2001年～2016年現在、48）の研究目的は、半数以上が新たな指標セットまたは指標の枠組みの開発で

あった。さらに多数の ST 指標をどのような基準や手法で体系化しているかという点では、経済、社会、環境といったテーマ別で行なっているのが 8 割に達することがわかった (図 1)。そのうちの約 4 分の 1 が複数の指標を様々な尺度で統合して得られた単一の指数 (インデックス) を開発するモデルであった。近年の STI 研究動向としては、こうしたインデックス型やシステム型、ならびに GIS 型といった数理的な解析に基づく STI モデルを開発する研究が増加してきている。

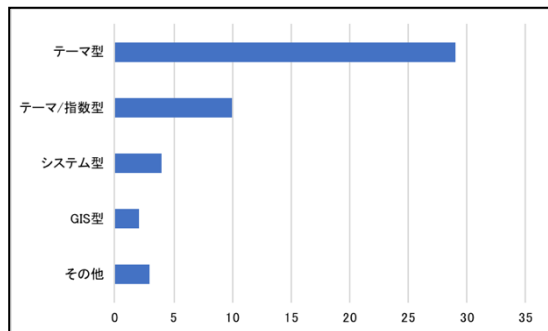


図 1 指標の体系化方法からみた 4 タイプの研究

以上のことから、持続可能な観光指標モデルの構築にあたっては、テーマに基づいて指標を体系化するのが最も一般的な方法であると言える。今後、研究成果を国際的な学術誌に掲載されるためには、より精緻な定量的な分析手法に基づいた研究が求められている。

## (2) ST 指標を用いた観光地管理の分析

①地域の課題を基軸とした ST 指標システム  
ここでは国連等の国際機関、海外の政府及び自治体等が開発・導入してきた観光地向け指標モデルについて、表 1 に提示したような地理的な適用範囲という観点から 4 類型に大別し、中核指標 (core indicator) の選定と指標体系化の基軸について比較考察した。

第 1 類型の地球規模で適用されてきた代表的な STI モデルとしては、1990 年代から国連世界観光機関 (UNWTO) が世界環境計画 (UNEP) 等と連携して開発し、2004 年に確立した観光地向け持続可能な開発指標モデルがある。同モデルは、観光が地域社会や観光に与える影響と観光が外的要因から受ける影響といった観光地が直面する多面的課題 (issue) を基軸として体系化されており、その中核をなすのが 13 の基本的課題 (baseline issues) と 29 の基本的指標 (baseline indicators) となっている。さらにこれらの指標を、UNWTO (2016) が示す統計的な枠組みを援用して分析すると、表 1 からわかるように、その半数が観光活動に係る基本的指標に偏っている。

その一方で、社会的な領域と観光地管理の

領域を測る指標が十分でないことが明らかである。現在、世界の 22 の拠点でこれらの持続性指標を用いた観光地のモニタリングが長期的に続けられている。大学と行政との連携に加えて、UNWTO 主催の年次総会において「観測所」の担当者が成果発表を行うことで相互に事例を通して情報交換する仕組みができているのも、この取り組みが長期的に継続できている要因となっている。

表 1 持続可能な観光指標システムの適用範囲別類型

適用範囲	推進組織	持続可能な観光指標システム	基本的枠組み (基準 / 指標)
類型1 地球規模 (Global)	①国連世界観光機関 (UNWTO) 国連環境計画 (UNEP) ②世界持続可能観光カウンシル (GSTC)	①観光地のための持続可能な開発指標モデル (ISDモデル) ②世界持続可能観光クライテリア (GSTC認証モデル) 観光地 (D) / 産業 (I)	①持続可能性課題ベース (13大項目 / 42中項目) ・観光地類型 (18) 別適用 ・指標開発手順 (12段階) ②持続可能性の4部門 ・マネジメント ・経済利益 ・地域社会 / 文化 / 旅行者 ・環境
類型2 国家連合規模 (Regional)	①欧州委員会 (EC) ②カリブ諸国連合 (ACS)	①持続可能な観光地マネジメントのための欧州観光指標システム (ETISモデル) ②広域カリブ持続可能観光圏 (STZCモデル)	①持続可能性の4部門 中核的な指標 (43) ・マネジメント (3) ・社会と文化的インパクト (13) ・経済的価値 (10) ・環境的インパクト (17) ②持続可能性指標 (14) ・環境 (8) ・社会 (5) ・文化 (1) ・経済 (5) 重複3
類型3 国単位 (National)	①コスタリカ観光局 ②スロベニア観光局 ③タイ王国管理機構 (DASTA)	①持続可能な観光のための認証 (CSTモデル) ②スロベニア観光のグリーン計画 (GSST) モデル ③タイ持続可能な観光マネジメント基準	①持続可能性の4部門 ・自然環境マネジメント ・社会経済 ・サービス ・外客 ②国際認証制度 (GD) による全国ブランド戦略 ③GSTC-DIに準拠した基準 エクスアドル / インドネシア / 韓国
類型4 国内地域単位 (Local)	①カンガルー島住民主体の組織 ②ジャクソンホール & イエローストーン持続可能な観光協議会	①最適化管理運営モデル (TOMM) ②ジャクソンホール & イエローストーン持続可能観光地計画	①持続可能性の5部門 ・経済 ・観光市場 ・環境 ・体験 ・社会 / 文化 ②持続可能性の4部門 ・マネジメント / 経済利益 ・地域社会 / 文化 / 旅行者 ・環境 GSTC基準の早期適用地域

## ②持続可能な観光の世界的基準の確立

世界的にもう一つの潮流となっているのが地球規模の持続可能な観光管理協議会 (Global Sustainable Tourism Council、以下 GSTC と略す) による持続可能な観光の世界的基準の確立と国際認証の取り組みである。

表 2 統計的領域の枠組みからみた ST 指標システム

統計的領域	UNWTO (2004)	ETIS ver.1 (2013)	ETIS ver.2 (2016)
	基本的指標29	中核指標21	中核指標43
観光活動	観光客数及び移動	5	5
	観光需要及び消費額	1	4
	観光事業生産高	5	4
	観光客満足度と評価	2	1
	イベント、場所、文化資源	-	-
経済	雇用及び所得	2	5
	交通統計	-	3
	インフラ整備	-	2
環境	上水及び下水	3	4
	廃棄物	3	3
	エネルギー及び温室効果ガス	2	6
	自然環境の状態	-	2
	環境費用	-	-
社会	地域住民の態度及び参加	2	2
	研修及び資格	-	-
	健康	1	-
	犯罪及び治安	-	1
	その他 (アクセシビリティ)	-	3
観光地管理	観光計画、促進、マネジメント	-	-
	総合計画及びその他の政策	3	-
その他 (認証を有する観光機関等)	-	-	1

資料 UNWTO (2016), p. 12 及び ETIS2013 より筆者作成

本研究では、こうした世界的基準に基づく認証制度が、大きく3つの段階を経て確立されてきたことを明らかにした。すなわち、開発と環境の問題を地球規模で話し合うサミットが開催されたのを契機に起こった、1)環境特化型の認証ラベルの乱立期(概ね1992年~2002年)、続いて2)持続型観光認証の萌芽期(概ね2003年~2012年)、そして3)世界基準に基づく持続型観光の認証制度の確立期(概ね2013年から現在)である。この第二段階において、世界的な持続型観光の認定団体であるGSTCが創設(2008年)され、持続可能な観光として最低限遵守すべき世界共通の基準が提示されたことは意義深い。

2017年現在、同協議会は、観光産業向け基準(GSTC-I)と観光地向け基準(GSTC-D)を策定し、これらの基準に準拠していると評価されGSTCの認定を受けた認証基準も世界中で増えてきている。

本研究において、現在国内で推進されている持続型観光を類型化した結果、2つのアプローチで実施されていることが明らかとなった。すなわち、一つには上述①のUNWTO型モデルのように、持続可能性指標の開発にあたっては地域と一体となってボトムアップで行っていく方法である。もう一方のアプローチは、②でも見たように、まず持続可能な観光の世界基準(GSTC)を所与のものとし、それをガイドラインとして地域とともに持続可能な観光の実現を目指し、最終的には観光地の国際認証を目指す方法である。現在、国内の自治体でも、そうした目標の達成を目指すところが出てきた。その意味でも、2017年「持続可能な開発のための観光国際年」を経た今、国内において観光の持続可能性基準及び指標の確立はまさに急務となっている。

### (3) STI 指標開発の専門家へのヒアリング

本研究では、観光の持続性指標の開発及びその地域適用に関してより深い理解を得るため、その作業に直接かかわってきた専門家に対してヒアリング調査を実施した。海外では、持続型観光に関する取り組みが先行する欧州(イギリス)にて、持続可能な開発のためのヨーロッパ観光指標(European Tourism Indicators for Sustainable Development, 以下ETISと略す)の開発に早期から携わった3名の専門家から話を聴くことができた。紙面の都合上詳細は省くが、そのうち2名は現在もETISのエキスパート集団の一人として活躍し、またもう一人はETISバージョン2(2016)の確立に中心的な役割を果たしている。表2からも明らかなように、ETIS 2016年版では、以前は選択的な指標であったものの多くが中核的な指標となっている。すなわち、全部で43の中核的指標から構成され、それらが

網羅する範囲も広がっており、より包括的な指標システムが欧州で構築されたと言える。

また、近年急速に成長を続けるアジアは、持続型観光の分野では、タイ王国、韓国、インドネシア等、日本よりはるかに先駆的な取り組みをしているところが多い。その中で、GSTCの基準をいち早くガイドラインとして取り入れたスリランカエコツーリズム基金(1998年創設)の代表に対して聴き取り調査を共同で行うことができた。現地では、同基金が支援している村を訪れ、そこで持続型観光ツアーを企画し、販売する直前の担当者から、資金の流れや仏寺と一体となったコミュニティ・ベースト・ツーリズム(CBT)の実態について詳しく聴き取ることができた。地域資源を活用した持続型観光の取り組みの実態を参与観察することで、品質管理上の課題も明確となった。課題解決に向けて、スリランカのペラデニア大学はじめ地元の大学と共同研究体制を構築した。さらに、北米のサステイナブル・シティ第一号となったサンフランシスコ及び周辺エリアにて、持続型都市の取り組み成果と現在直面する課題について現地調査を行なった。スタンフォード大学では、日米比較の視点から持続可能な都市形成に関するセッションにて、現地の大学院生、大学教授、専門家と意見交換を行った。

### (4) 持続可能な観光の日本型指標システム

これまでの研究成果を踏まえ、ここでは本研究の目標であった「持続可能な開発のため日本型観光指標」(仮称 Japanese Tourism Indicators System, 以下JTISと略す)の確立を目指した取り組みについて論じる。

まずJTISの基本的枠組みについては、これまで述べてきたように、まだ日本国内では自治体レベルで自前の基準を確立して地域に適用している自治体は殆ど存在しない状態である。但し、前述したように、今年度中に海外の認証機関を通じて認証を受ける自治体が出現する見通しである。そうした状況下、本研究では地域内の多様な立場のステークホルダーにとって有益な効果を持つものとなるよう、現場の状況を熟知している専門家及び自治体と連携しJTIS開発に着手した。

中部圏の中津川市及び恵那市から構成される「ひがしみの観光推進協議会」管轄のプロジェクトの運営委員長(宮田久司氏)や協議会のメンバーの協力を得たうえで、地域の現場の観光地経営へ活用できるようなJTISとツールの開発を目指した。具体的には、地域の諸活動の評価及び改善に役立てるためのツールとして「スコアカード(観光持続可能性スコアカード)」の予備的モデルを作成し、中津川・恵那地域における諸活動や現場にて試験評価を実施し、今後の実用化につな

がる実例づくりを行うこととなった。

まず、基本的な考え方として、持続型観光の推進が世界的な潮流となった今、日本の観光地が今後も世界市場で国際競争力をもって魅力ある場所、人が訪れたいくなる場所になるためには、持続可能な開発に向けた観光地のマネジメント手法を確立することは優先度の高い目標であると考え。観光のガラパゴス現象が起きないように、世界基準を熟知したうえで、地域独自の個性を反映できるような汎用性の高い日本型観光基準・指標モデルの構築を目指す必要がある。

そこで、JTIS の設定及び活用に対しては、以下の5つの段階によって構成される「システム認証」としての活用が想定されている。各段階では、評価基準及び観点について GSTC 基準に見られるような4つの柱による基本構成に準拠しながらも、日本独自の基準及び指標が追加されている。また、評価においても、推進体制や参画等の程度に応じてきめ細かい点数設定を定め、スコアカードのポイントを設定するなど、見える化を徹底する。

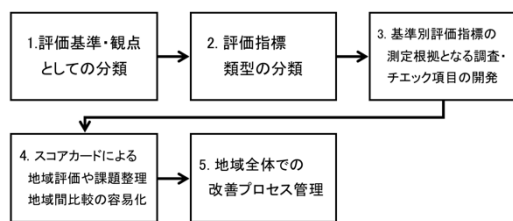


図2 JTIS の設定及び活用のプロセス

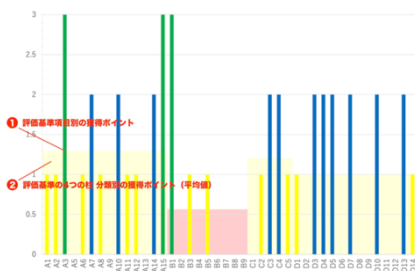


図3 JTIS の評価分類別獲得スコアのイメージ

本研究では、JTIS 構築と活用のプロセスを段階的に示す評価手法を確立したが、今後は地域に適用し、評価結果の検証を通して精緻な評価システムへと改善する必要がある。

#### (5) 総括

本研究では、中部圏の別の自治体担当者の協力を得て、ガイドラインとしての GSTC 基準及び指標項目について現況に照らした見直しも行なった。その際に明らかになったことは、4つの柱のうち観光地マネジメントの評価領域に係る持続可能な観光政策や戦略、そして組織が日本国内には自治体レベルで未だ存在していないという実態であった。

今後は、本研究の成果を踏まえ、まず中津川市及び恵那市で地域レベルでの活用を目指し、その成果を定量的に検証していくことが必要だと考えている。欧州型モデルのように、システムの精度や使いやすさを高めていき、適用の範囲を段階的に拡大する計画である。

#### <引用文献>

- ① 二神真美 (2008)、観光における「持続可能性」指標の開発に関する一考察、名古屋商科大学報論集、53 巻 1 号、2008、151-166
- ② Zeppel, H. (2015). Environmental indicators and benchmarking for sustainable tourism development. In *The Routledge Handbook of Tourism and Sustainability* (pp. 187-199). New York: Routledge.
- ③ UNWTO (2016). *Measuring Sustainable Tourism (MST): Developing a statistical framework for sustainable tourism*.

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計9件)

- ① 宮川 泰夫、持続の観光構造と観光の持続機構：穢れなき小島国家スリランカの時空の変遷と持続的観光地管理の日本型総合指標、皇學館大学日本学論叢、査読無、第8巻、2018、25-141
- ② Miyakawa, Yasuo, Regional Renaissance and Rejuvenated Civilization in Japan for Sustainable Development and Global Innovation: Focusing on the Industry-Academia-Government Collaboration's Context, *World Technopolis Review*, Vol. 6, 査読有, 2017, 2- 35
- ③ 二神 真美、観光の持続可能性と日本型指標システムの確立を目指して：先行的な取り組み事例、名城大学外国語学部 第1回国際フォーラム・プロシーディングス、査読無、1巻、2016、43-47
- ④ 宮川 泰夫、世界的な持続可能な観光基準・指標の地域適用に関する批判的考察：持続観光の構造と観光持続の機構、名城大学外国語学部 第1回国際フォーラム・プロシーディングス、査読無、1巻、2016、57-60
- ⑤ アーナンダ クマーラ、Issues Concerning Destination Management for Sustainable Tourism in Sri Lanka、名城大学外国語学部 第1回国際フォーラム・プロシーディングス、査読無、1巻、2016、61-65
- ⑥ 二神 真美、地域社会における経済利益の最大化：GSTC 国際基準の B「経済」、Vol. 1、100 年先を見据えた観光地づくり (日本エコツーリズムセンター報告書) 査読無、2016、38-41
- ⑦ 宮川 泰夫、米国メガロポリスの変遷と西岸メガロポリスの特質：持続産業の観光構造と産業観光の持続機構、皇學館大学日本学論叢、査読無、第7巻、2016、1-110

- ⑧ 宮川 泰夫、観光の持続と持続の観光：現代日本総合観光学序説：持続可能な観光地管理の日本型総合指標システム研究1、皇學館大学日本学論叢、査読無、第6巻、2015、15-76
- ⑨ Miyakawa, Y. and Cha, Sang-Ryong, Roles of the University and Paradigm toward Creative Innovation on the Global Scene - Locus; Regional Renaissance and Civilization of Smart Sustainable Polis, World Technopolis Review, Vol. 4, 査読有, 2015, 182- 221

[学会発表] (計 14 件)

- ① アーナンダ クマーラ、国連 SDG と社会問題(招待講演)、中部プロボノセンター、2018年2月3日
- ② 二神 真美、GSTC 国際認証基準の読み方、2017年開発のための持続可能な観光の国際年：島原半島フォーラム分科会（日本エコツーリズムセンター主催）、2017年11月4日
- ③ アーナンダ クマーラ、歴史から見る日本とスリランカの関係(招待講演)、ジャヤワルダナ顕彰記念碑建立1周年記念フォーラム、2017年10月8日
- ④ アーナンダクマーラ、地域が進める持続可能な開発目標、国際連合 SDGs セミナー（国際学会）、2017年2月1日、国際連合地域開発センター（愛知県名古屋市）
- ⑤ Kumara, Ananda, Sustainable Regional Development through Participatory Approach in the Tourism Industry: Lessons from Case Studies in Sri Lanka (招待講演), 2016年8月30日, United Nations Centre for Regional Development, Nagoya International Center (愛知県名古屋市)
- ⑥ Chandrasekhara, D., Kumara, Ananda, Gunawardhana, N., Culture in Tourism: Lessons from the Case Studies in Sri Lanka in Comparison with Japan, The 4<sup>th</sup> Conference on Sri Lanka Japan Collaborative Research (国際学会), 2016年8月20日 University of Peradeniya (Peradeniya, Sri Lanka)
- ⑦ Chandrasekhara, D., Kumara, Ananda, Gunawardhana, N., The Unseen Opportunities for Expanding Educational Tourism: Future Prospects of the Collaboration between Japan and Sri Lanka Higher Education, The 4<sup>th</sup> Conference on Sri Lanka Japan Collaborative Research (国際学会), 2016年8月20日 University of Peradeniya (Peradeniya, Sri Lanka)
- ⑧ Futagami, M. and Guanawardana, N, The Path towards Sustainable Tourism Development: Lessons from Global Lessons, The 4<sup>th</sup> Conference on Sri Lanka Japan Collaborative Research (国際学会), 2016年8月20日 University of Peradeniya

(Peradeniya, Sri Lanka)

- ⑨ Miyakawa, Y. and Guanawardana, N, World Heritage and Sustainable Tourism: Focusing Hiraizumi, Iwate, The 4<sup>th</sup> Conference on Sri Lanka Japan Collaborative Research (国際学会), 2016年8月20日 University of Peradeniya (Peradeniya, Sri Lanka)
- ⑩ 宮川 泰夫、A Mobile Perspective: the Geography of Jean Gottmann (国際学会), 2016年3月29日, Association of American Geographers, (San Francisco, USA)
- ⑪ アーナンダ クマーラ, Sustainable Tourism- Important Issues on the Vitalization of the Society by Utilizing Region: Specific Inherent Characteristics and Traditional Customs(招待講演), 2016年1月2日 Regional Secretariat, Uva Provincial Council (Badulla, Sri Lanka)
- ⑫ アーナンダ クマーラ, Ideas for Sustainable Economic Development and Tourism: Lessons from Japan (招待講演), 2015年12月28日, Industrial Technology Institute; Ministry of Science, Technology and Research (Sri Lanka)
- ⑬ アーナンダ クマーラ, Sustainable Tourism: Important Issues on the Vitalization of the Society by Enhancing Traditional Customs and Practices (招待講演), 2015年12月29日, Regional Secretariat, Hambantota District Council; Ministry of Public Administration & Home Affairs (Hambantota, Sri Lanka)
- ⑭ アーナンダクマーラ, Some Issues of Importance in Relation to Education and Culture in Japan (招待講演), 2015年12月31日, Sabaragamuwa University (Beliulhoya, Sri Lanka)

[その他]

ホームページ等

<http://www2.meijo-u.ac.jp/~futagami/jtis/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

二神 真美 (FUTAGAMI, Mami)  
名城大学・外国語学部・教授  
研究者番号：70209138

### (2) 研究分担者

アーナンダ クマーラ (KUMARA, Ananda)  
名城大学・外国語学部・教授  
研究者番号：00271396

宮川 泰夫 (MIYAKAWA, Yasuo)  
皇學館大学・現代日本社会学部・名誉教授  
研究者番号：20024052